ピアスーパービジョンの現状と課題

－福祉現場での定着を目指して－

○　桃山学院大学（非常勤）　塩田　祥子（3523）

植田　寿之（3222）

ピアスーパービジョン、共に働く、現場への浸透

１．研 究 目 的

わが国の福祉現場において、スーパービジョンの浸透が十分でないことは長きに渡って指摘されている。その理由として、スーパーバイザーがいない、スーパービジョンを受けたことがないため方法がわからない等があげられる。それゆえ、スーパーバイザー研修や出版等が増えた。しかし、職場外で研修を受けた個人の成長だけではスーパービジョンの浸透に限界がある。また、力量あるスーパーバイザーを育成するには時間を要する。さらに、欧米発の理論にわが国の実践を当てはめようと固執しすぎ、スーパービジョン実践の準備段階で力尽きているようにすら感じる。したがって、理論発ではなく実践発のスーパービジョンが必要である。スーパーバイザー役割を担う人材が育っていないのであれば、それに応じたスーパービジョン実践が求められる。

そこで、誰もがスーパーバイザー役割とスーパーバイジー役割を担い、身近な仲間が集い合うスーパービジョン、すなわち、ピアスーパービジョンに焦点を当てた。仲間同士で技術を学び、共に支え合うスーパービジョンの実践である。そうした実践を積み重ねることで、スーパービジョンの浸透の足がかりとなり、さらに、スーパーバイザーとしての手腕を磨くことにもつながる。しかし、様々な書物、研修の中で、ピアスーパービジョンの形態を取り上げるものは多いが、方法、プロセスを十分述べているものは少ない。また、何を持って「ピア」とするのか、ピア概念、仲間概念も曖昧である。せっかくメンバーが集っても、単なるおしゃべりになり、また、どこから手をつけてよいのかわからないということでは、従来の個別スーパービジョンと同様、浸透が難しくなる。より、スーパービジョンを身近に感じるためにも、参考となる実践例が必要となる。

本研究では、福祉現場におけるピアスーパービジョンの現状理解、実践にあたっての留意点、課題等を抽出し、どのような課題を超えれば、ピアスーパービジョンの実践、浸透につながるのかを追究していく。さらに、その職場ごとに応じたスーパービジョンのあり方について示唆するものである。

２．研究の視点および方法

身近な実践としてピアスーパービジョンに焦点をあてる。

（1）2009 年スーパーバイザー養成研修受講者（1 会場、7 人）にピアスーパービジョン実践に対する予備的調査を行い、アンケート項目等、わかりやすい表現を確認した。

（2）2010 年スーパーバイザー養成研修受講者（3 会場、計 46 人）を対象に、ピアスーパ

ービジョンの実践状況をアンケート調査した。内容は、実践している方には、メンバー、実践過程、実践可能な理由を、実践していない方には、実践できない理由をそれぞれ記述してもらった。

(3) アンケート結果をもとに、①メンバー、②内容、③展開方法、④問題点、⑤実践するための条件をまとめた。

(4) ピアスーパービジョンの課題、スーパービジョンそのものの課題を抽出した。

(5) その上で身近なスーパービジョンのあり方を提起する。

３．倫理的配慮

・文献引用の際には、自説と他説を峻別することに注意を払った。

・研修受講者、主催者に、アンケートの趣旨、発表方法等説明し同意を得た。

４．研 究 結 果

・メンバー：同職種、同僚間での実践は困難である。また、経験、年齢においてもばらつき（幅）がある。→仲間意識に影響を及ぼす。

・内容、展開方法：事例検討会の形態が多い。→事例の方法論のみならず、事例提供者を支える視点があるのか、また、メンバー間、お互いの学び育ち合いがどれだけ意識されているのかは定かではない。

・利点：安心感、視野の転換、気づき等

・問題点：視野が狭くなる。客観的な視点が薄い等→身近ゆえの課題がある。

・よりよく実践する条件：時間数、スーパービジョンそのものの理解不足等。

・実践していない施設の課題：スーパービジョンそのものの理解不足等。

5. 考 察

福祉現場では多職種のチーム実践が求められており、年齢、経験のばらつきだけでなく、様々な領域の価値観が混在している。そのことが“ピア”のスーパービジョン実践を困難なものとしている。しかし、職種等“同じ”であることに固執するのではなく、“違い”を認め合いながら、共に働く者同士学び支え合う関係が必要となる。“違い”を強みとして、ケースへの多面的理解につなげることが求められる。

また、スーパービジョンそのものの“敷居の高さ”を感じる。スーパービジョン実践のための準備、形作りといった段取りが重荷となっている。そのことにより、日常の業務とスーパービジョンが乖離しているようにすら感じる。しかし、手探りでも、できるところからの実践でよい。無論、手探りの実践を批判する声もあるが、実践前に無理とあきらめてしまっては、スーパービジョンが福祉現場にいつまでも根づかない。そのような実践の積み重ねが、理論に裏付けされたスーパービジョン実践につながると考える。それぞれの福祉現場に応じたスーパービジョンのあり方をチームで模索していくことが求められる。今後、研修の機会では、一方的な理論の提唱だけではなく、職員それぞれが敷居の高さを抱いていることに気づき、一歩を踏み出す支援も必要となる。